ESDとしての国際交流学習の展開の可能性
―国際交流壁画共同制作活動を通して―

The Possibility of international exchange programs as ESD
(Educational for Sustainable Development)
－International Intercultural Mural Exchange project－

清　水　和　久
Kazuhisa Shimizu

〈要旨〉

2005年に国連総会で決議されたESD（持続発展教育）は，2015年までの10年間を「ESDの10年」と位置づけ，各国での実践が期待されている。日本においてはESDを実施する母体として273校（2010年12月）がユネスコスクールとして登録されている。このESDの活動の１つとして日本と海外の子ども達が共同で壁画を作成するプロジェクトを提案し，その教育的意義や効果をこれまでの2006年から2010年までの実践から検討しESDとしての今後の展開の可能性を提案する。

〈キーワード〉
国際交流学習，持続発展教育，カリキュラム開発程

1　はじめに

ESDとは”Education for Sustainable Development”の略称である。日本語では「持続可能な発展のための教育」と訳されており，「持続発展教育」と略称している。2002年のヨハネスブルクのサミットにおいて日本が「持続可能な開発のための教育10年」を提案し同年の国連総会にて，2005年から2014年までの10年をESDの10年とする旨の決議案が採択された。また，文部科学省及び日本ユネスコ国内委員会では国際理解教育や環境教育などといったユネスコの理念に沿ったユネスコスクールの研究テーマが「持続発展教育」のテーマと一致することから，ユネスコスクールを持続発展教育の推進拠点として位置づけている。(1)これらを受けて金沢市では小学校59校中，平成23年度において31校がユネスコスクールに加入しており，今後も増加傾向にある。これは，ユネスコスクールに加入することによって今までの総合的な学習の時間を含めた教育活動を，ESDの観点から見直し，さらに質を高めることを目指していると思われる。

ESD研究会(2)によれば「ESDとは，プロセスを重視する学習であり，児童の『学ぶ意欲』や『目的意識』を高め，『思考力』や『判断力』，『構想力』や『表現力』，そして『行動力』等の資質･能力を育成する学習である。」と述べている。この内容自体は総合的な学習の時間のねらいとするものとあまり変わらないが，ESDは一歩踏み込んで「国際的な課題を解決し，多文化共生や国際協調を基盤とする社会を作るための担い手を育成する教育」であるという大きな観点を持っている点で異なっている。

また，2008年に公示された小・中学校の新しい学習指導要領および2009年度に公示された高等学校の学習指導要領には持続発展可能な社会の構築の観点が各教科に盛り込まれている。小学校においては，総則の中で道徳教育の言及の中で，「公共の精神を尊び，民主的な社会及び国家の発展に努め，他国を尊重し，国際社会の平和と発展や環境の保全に貢献し未来を拓く主体性のある日本人を育成するため」と記述されており，社会や理科にも関連した記述がなされている。(3)

中学校においては理科，社会科において明確に「持続可能な社会の構築のため」「持続可能な社会をつくる」などの記述がみられる。(4)また高校においては，地理歴史において，「環境，資源，人口などの課題から解決のために持続可能な社会の実現を目指した各国の取組や国際協力が必要であること」，公民においては，「持続可能な社会の形成に参画する」(5)ことが記述されている。

以上のことから今後の教育実践においては，キーワードとしてのESDは欠かせないものである。小学校の学習指導要領の中に「持続発展」という言葉は特に明記されていないが，ESDに関わる実践は各校で総合的な学習の時間との兼ね合いで実践されている場合が多い。そこで研究対象を

金沢市の小学校の中でも，特にESDを積極的に取り入れることを目指しているユネスコスクールの小学校にし，総合的な学習の時間のテーマなどを分類して傾向を知るとともに，これまで筆者が小学校において関わってきた国際協同制作活動の分類と比較することで，国際協同制作活動が今後のユネスコスクールでの実践として活用できるかどうかの可能性を探ることとする。

２　研究の方法

２−１　総合的な学習の時間のテーマの調査分類

平成23年度金沢市内ユネスコスクール参加校の総合的な学習の時間のテーマの調査分類をおこなう。具体的には平成23年度の，金沢市内のユネスコスクール参加校30校の３年から６年生までの総合的な学習の時間のテーマを調査し分類する。（学年別にテーマを数えるため全体では約120事例）[6]

２−２　国際協同制作活動の実践事例の分類

ここでいう国際協同制作とは，筆者が2006年度からJAPAN ARTMILE[7]とともに取り組んでいる「アートマイル国際交流壁画共同制作プロジェクト」International intercultural mural exchange project（以下IIME）を指し，日本と外国の小学生がICT等を活用して協同で，１枚の大きな壁画（縦1.5m×横3.6m）を完成させるプロジェクトである。

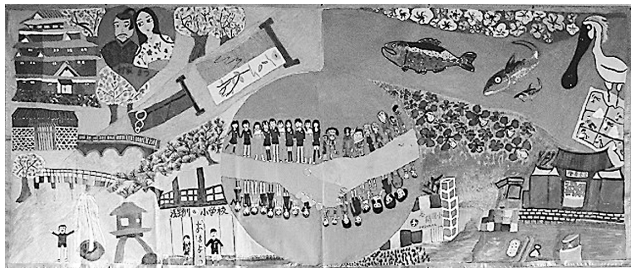

図１　2010年度国際交流壁画（金沢市立浅野川小と台湾志開小）

上記の絵は，左半分が日本，右半分が台湾の子ども達が描いた絵である。それぞれ自国の自慢できる伝統文化を描いており，両者は川でつながっており，握手をしている手の上には，このプロジェクトに参加した子ども達自身が描かれている。このプロジェクトは，単に協同で絵を完成させるだけでなく，作成のプロセスを重視している。このデザインに落ち着くまでには何度も児童や教師同士の話し合いが持たれている。絵の作成に至るまでには相手とわかり合うために自己紹介カードやビデオレターなどを交換している。その後自国の文化や相手の文化を調べ，絵のテーマを共有化するためにTV会議などで英語を使って説明することによって，英語自体の必要性を体感することができる。また，絵に表すことでの表現力，完成させることでの達成感を味わうことができる。このようにツールとしてTV会議や，掲示板などのICTを活用し，生活背景の異質な集団とのコミュニケーションを通ることができる，そして何よりも日本側が先に描くことで，リーダーシップをとって児童が意欲的に取り組めるプロジェクトである

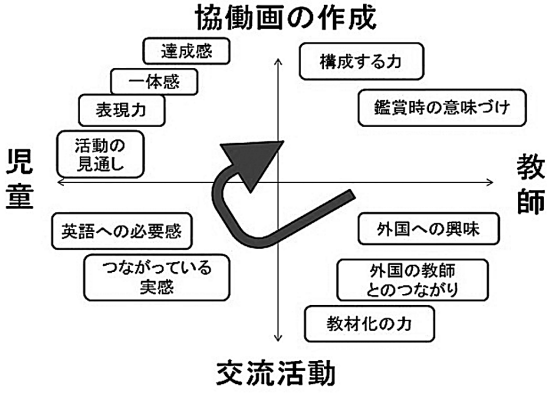

図２　国際共同制作プロジェクトのプロセス

本論文では2009，2010年度において金沢市の小学校で取り組まれた21のIIMEプロジェクトの事例についてテーマや教師のねらい等について分類をおこない，ESDとの接点を考えたい。

２−３　国際協同制作作品展示会について

2007年度から2010年度まで金沢市の小学校を中心に作成してきた国際協同制作壁画作品70展あまりを展示する機会を設け，参観者にアンケート調査を実施。日本と外国の子供たちとの絵を通しての「つながり」についての印象を６件法で調査。そのほか自由記述で感想を記入してもらう。

・日時：2011年12月20日〜25日

・場所：金沢21世紀美術館　市民ギャラリーA

３　研究の結果

３−１　総合的な学習の時間のテーマの分類

金沢市内のユネスコスクール参加小学校30校の３〜６年生の総合的な学習の時間のテーマ120事例を分類し「環境」「伝統文化」「地域」「国際理解」「福祉」「食文化」「キャリア教育」「生命」の８つのジャンルに分けた。

ユネスコスクールの「持続可能な開発のための教育」という趣旨に沿って行われているためか，「環境」を扱ったものが一番多く，ほとんどの学校で扱っていた。

次に多いのは伝統文化や地域のテーマで，これは間接的な調査ではなく，児童が直接調べ，体験できることが可能であるためと思われる。

しかしながら，ESDでも最終的に中心的な活動となると思われる国際理解に関するテーマは，ターゲット学年である６年生のうちの３分の１程度の実践にとどまっているこ

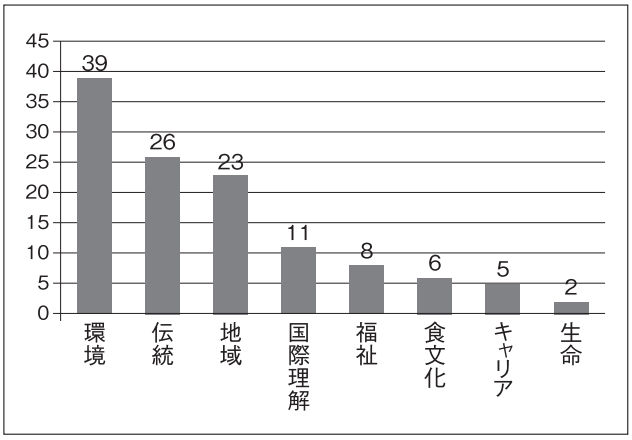

図３　総合におけるテーマごとの分類（n=120）

とがわかった。

さらに詳しく各学年の総合のテーマを見ると学年ごとに特徴が見られる。

表１　各学年の総合のテーマ

	３年	４年	５年	６年
１位	地域	伝統	環境	国際
数	16	11	21	9
２位	環境	環境	食文化	伝統
数	6	7	3	8
３位	伝統	地域	国際	環境
数	4	6	2	5
４位	食文化	福祉	伝統	キャリア
数	3	6	2	5

３年は地域，４年は伝統，５年は環境，６年は国際理解と伝統のテーマが多かった。これは，各学年の教科学習（社会や理科）との兼ね合いが大きいためと思われる。５年では，理科の植物の生育や社会の米作り，野菜作りなどを通して環境教育につなげられる内容が多くなっており，６年は社会科における歴史の学習から地域や伝統文化の調査につながり，歴史の学習後には，国連関係や海外協力隊の学習が予定されているからと思われる。

ここで５,６年の国際理解のテーマをさらに詳しく見てみたい。11の事例の内，地域の特徴的なものを調べて，外国の人に発信する事例が８つ，ユニセフなどの国連の組織や海外協力隊員など外国に関わる組織や人を調べて「考察するパターン」,の事例が３つあった。前者と後者の違いは，前者が発信する相手が実在しており，発信相手を最初から意識しての取り組みに対して，後者は内容そのものの考察を重視しており，発信対象を特別意識していない点が異なっている。前者のタイプとして筆者の関わる国際協同制作活動を取り入れたプロジェクトの実践が４校あった。国際協同制作は調査したことを最終的に絵によって情報として相手に「発信」するものであり，それは一方的な発信ではなく相手と内容について合意のできた協同作業としての成果物である。この活動では世界とのつながりを児童自身が描画を通して体感的に感じることができる点で優れていると考える。

３−２　国際協同制作活動の実践事例の分類

2009，2010年にIIMEを行った小学校の事例21個について，「絵のテーマ」と「教師のねらい」について分類を行った。

表２　国際協同制作活動参加校一覧

	学	年	国	テーマ	ねらい	T会
1	E	3	イタリア	地域	表現力	TV
2	F	3	カナダ	地域	表現力	
3	YA	3	カナダ	地域	情報発信	
4	YA	3	アメリカ	地域	情報発信	
5	YB	5	ザンビア	命	表現力	TV
6	G	5	インドネシア	環境	英語力	TV
7	G	5	インドネシア	環境	表現力	TV
8	YB	5	ロシア	食文化	食文化	
9	YD	5	カナダ	食文化	食文化	
10	H	5	台湾	地域	表現力	TV
11	I	5	カナダ	地域	表現力	TV
12	J	5	ザンビア	伝統文化	意欲	
13	K	5	インドネシア	伝統文化	表現力	TV
14	Yc	5	東イスラエル	伝統文化	協調性	TV
15	Yc	6	インドネシア	環境	学習意欲	TV
16	Yc	6	東イスラエル	伝統文化	英語力	TV
17	L	6	カナダ	伝統文化	図工的鑑賞	TV
18	YD	6	台湾	伝統文化	英語力	TV
19	M	6	韓国	伝統文化	意欲	TV
20	Yc	6	台湾	伝統文化	意欲	TV
21	Yc	6	台湾	伝統文化	表現力	TV

＊学としてYがついている学校はユネスコスクール参加校。TVは２国間でのTV会議を実施したことを表す。

21事例のうち10事例がユネスコスクール未加入校，残り11事例がユネスコスクール加入校であった。

ｉテーマについて

これらは，国際理解・国際交流の実践であるがこの活動では「何を題材として」交流を行うのかが重要となる。共通の題材がなければ，互いに自己紹介を行って，いつの間にか交流が消滅してしまうという場合が多い。交流のためには双方が共通で取り組めるテーマが必要である。ただこのテーマはなるべく両者とも取り組める用に，伝統や環境

など大きなくくりのテーマの方がよい。

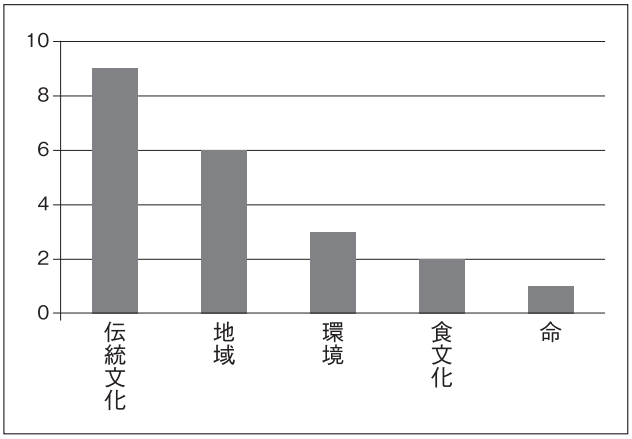

図４　国際交流学習のテーマの分類（n=21）

実践事例では交流のテーマとして多いものは伝統文化と地域を扱ったものであった。伝統文化の場合は，絵の中に自分達が調べた伝統的な建物や場所（金沢城や兼六園），伝統工芸品（加賀友禅,輪島塗，金箔の作品）等が描かれる場合が多い。また地域を扱ったものには，自分達の学校，地域の自慢の建物や場所などがよく描かれる。また，環境問題では，学習のあとに互いの国の絶滅危惧種を調べて描いたりする場合も多い。これらのテーマは比較的取り組みやすく，交流相手国との違いや類似点などが明確に認識されるので取り組みやすい。以下，地域と環境のテーマについて実際の作品を例に説明を行う。

○地域をテーマとする作品

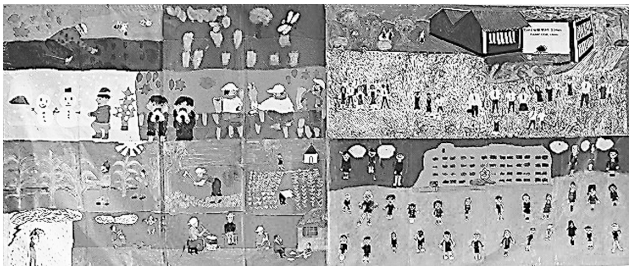

図５　2009年度の作品（金沢市立西小とザンビアの小学校）

右側下及び左上が日本の学校の描写部分。左上には日本の四季が描かれ，社会で習う米作りの様子が描かれている。右下は日本の学校の校舎で，参加した子ども達自身が１人１人描かれている。それに対応する形で左下にザンビアのトウモロコシ栽培の様子が雨季と乾季の季節とともに描かれ，右上には制服を着たこのプロジェクトに参加したザンビアの小学生の絵が描かれている。絵の構図は事前に話し合って決めてはいるが，日本が先に描くので後のザンビアの絵は日本と対比できる形で描かれており，絵を見ただけで両者の文化的背景の違いが非常にわかりやすい。[8]

○環境をテーマとした作品

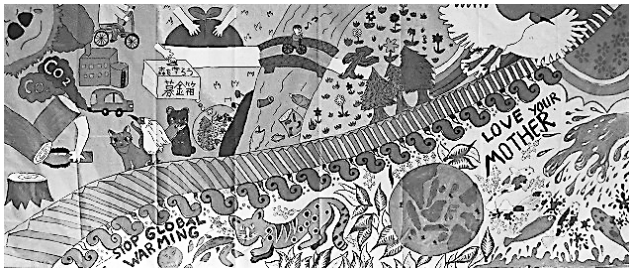

図６　2010年度の作品　（金沢大学附属小とインドネシア）

テーマとして環境を扱った作品の解説：左上が日本，右下がインドネシア。左側が森林伐採や排気ガスで環境が悪化している状態を表しており，絶滅危惧種の動物が困っている状態である。それが階段を上って右上に行くことで自然環境が回復しトキが飛んでいる未来を表している。インドネシアも地球温暖化防止を訴えており，絶滅危惧種の動物を描き，水や緑あふれる地球を描いている。日本の描いた絵にきちんと対応した絵になっている。日本の子ども達はできあがった絵を鑑賞することで日本との共通点や相違点に気づくことができる。

このように相手と協同で作品を作るというゴールが明確なため，協同学習の意識が育ち，半年に及ぶプロジェクトではあるが交流の意欲が持続しやすいと思われる。

ⅱ国際理解，国際交流学習のねらいについて

国際協同制作は「生活のバックグランドが全く異なる相手との交流」「日本語が通じない相手と協同で最終的に１つのものを仕上げる」という困難さをかかえての活動となる。しかし，絵の完成時には満足感や達成感など苦労以上の大きな成果を期待することができる。絵を完成させることが，一応のゴールとなるが，そのゴールに向かう方法はいろいろあり，教師が様々に工夫することができる。また交流のテーマと児童につけたい力（ねらい）は特に関係せず，どのようなテーマであっても表現力や学習意欲など教師がつけたいと思う力を盛り込むことが可能である。その点がこのプロジェクトの柔軟なところである。

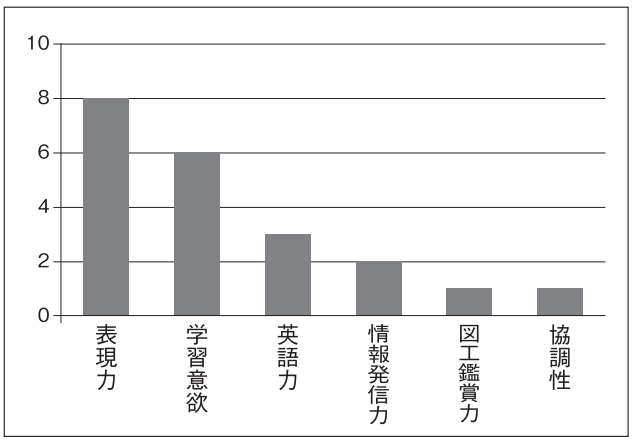

図７　国際交流学習のねらいの分類（n=21）

交流のねらいを分類してみると，表現力をつけたいと思う教師が多い。国際交流ではTV会議が有効に働く場合が多い。実践例からも21事例中，15事例でTV会議を行っている。回数は例え１回でも，相手とのリアルタイムの交流は児童の活動意欲を高める。また，複数回のTV会議により，言語の異なる異文化の交流相手を少しでも理解し，こちらの伝統や文化についても知ってもらおうと，よりよい表現方法を工夫し，言葉だけに頼らない意志伝達の手段を児童自らが主体的に考えるようになる事例も多く見られた。

特に学習意欲に関していえば，自分達が調べたものを絵として伝えたい相手が本当に実在し，なお且つTV会議において，相手の顔が見え，声を聞くことができる体験があれば，目的意識，相手意識をずっと保つことができるので，児童自身の学習意欲は高いまま維持することができる。

3−3　国際協同制作作品展示会について

金沢21世紀美術館でおこなった展示会には６日間でのべ2300名の入場者があった。展示した絵を描いた自由記述の感想は，「こどもでも絵を通して国際交流ができるという事実に対して驚いている」という意見が多く，協同で描かれた絵に対する賞賛の声が多かった。また，小学校の国際交流の成果物としての壁画がたくさんあることに驚いている感想も多かった。以下感想を紹介しておく。

表３　参観者の感想

- 小さなうちに先入観なしに素直な心で世界とつながりを持つことは大切であり、協力という力で世界を一つにすることができると感じた。
- 自国のことを知り、相手の国のことを知り、学ぶということのすばらしさ相手の国のことを考える心を育てる最高の機会だと思った。すべての子どもたちにこのようなすばらしい体験をさせてほしいと思った。
- 絵を通して世界のこどもたちがつながれていることがとてもすてきです。このような経験をしたことはこどもたちの記憶の片隅に残り、将来の平和な地球を作っていくことにつながるように感じます。

図８　展示のためのポスター

図９　展示の様子

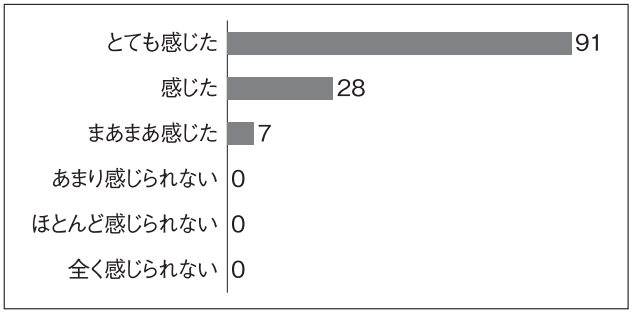

図10　絵から子供たちのつながりは感じられたか（n=126）

つながりのアンケートをみると，回答者のほとんどが絵から日本と外国のこども達との「つながり」を感じており，参観者に与えた感動は大きかったと判断できる。このプロジェクトに参加した児童自身も自分の作品が美術館で展示されたことでさらに達成感を味わったであろうことは予想できる。

このように国際交流の成果が作品として残り，展示会という発信の場を持てたことは，このプロジェクトを進めていく上で大いなるプラスであると考える。これまで作成された成果物の壁画は，エジプト，カナダ，台湾など世界各地のイベントで展示され，展示状況はweb上で伝えられている。

４　考察

ユネスコスクールのよさは，現在行われている教育実践をESDの枠組みで捕らえ直すことで，これまでの総合的な学習の時間の意味を「深化させる」ことである。これらはESDカレンダーとして各教科とのリンクも含めて各学校で取り組まれている。また，ESDの視点を持った他校の仲間と協同学習の機会や教員同士の「情報の連絡網を持てる」ことにもある。しかし，金沢の小学校のESDの事例を見る限り海外との交流も含めて協同学習に関してはまだ十分なされているとはいえない。まずESDが始まったばかりなので，もっぱら特色ある地域の調査活動などが中心で，その情報を外部に向かって発信することを前提にした実践は少ない。まして海外との協同学習となるとかなり敷居が高いことになる。

一方，はじめから協同学習を前提としているIIMEの取

り組みは，２国間で絵を完成させるというゴールが明示されているので，必然的にコミュニケーションを取る必要性が出てくる。また異文化との交流に対しては自分と同年代の交流相手が存在することで児童自身の興味関心も高く，一度自分のパートナーが決まると，活動の最後まで相手のことを気にかけており，ニュースなどで交流相手の国名が出るととても関心を持っていた。

また，教師自身も外国の交流校の教師と意志を通じさせながらプロジェクトを進めていくことになるので，相手と共に創り上げる喜びを体験することができ，児童と同じようなスキルを求められるところにおもしろさがある。

これらのことから総合的な学習の時間とESDをおこなうユネスコスクールとIIMEの３者の関係を図にまとめてみた。

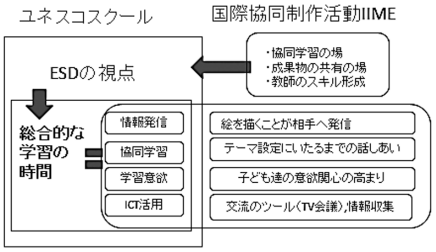

図11　総合とユネスコとIIMEの関係図

総合的な学習の時間でのキーポイントは「情報発信」「協同学習」「学習意欲」「ICTの活用」である。これらはIIMEのプロジェクトにおいては，「情報発信」は，「絵を描くことそのもの」，「協同学習」は「テーマ設定に至るまでの話し合い」，「学習意欲の持続」は，「明確なゴールと実在する交流相手の存在」，「ICTの活用」は「交流のためのTV会議やweb掲示板」と「取材のための情報機器の使用」などに関連づけられる。

ESDの代表的なテーマは，伝統文化，環境教育，国際理解教育，福祉教育などがあげられている。これらのテーマを通して持続発展可能な社会を担う児童・生徒を育成していくわけであるが，内容理解とともに，学んだことを表現する場，発信する場，として協同制作活動を行えば，発信する対象＝交流相手となるので，相手意識が明確になり，協同制作という目的意識もはっきりさせることができる。

しかし，ユネスコスクール参加校の中でも他校との協同学習の場や，成果物の外部への発信の場，教師自信のスキル形成の場等は充分保障されているとは言えない。ユネスコスクール自体はASPnetとよばれる参加校同士で学校間交流を行えるような仕組みはつくられているが，交流の必要感となるとあまり高くない。一方「IIMEはこれらの場が枠組みとして最初から保障されており，国際理解をテーマとしなくても，これまでの環境や地域，伝統文化を発信する枠組みとして利用でき,必然的に相手と比較する中で「国際理解」ができることになる。

つまりIIME自体は，交流を保証する枠組みであって，絵を描くというゴールがあるため情報発信の場としても保証されていることになる。この枠組みをうまくユネスコスクールで利用することによってはじめから協同作業と情報発信を意識した活動を仕組むことができると考える。

５　まとめ

IIMEはESDを実行するために,情報発信の場と協同学習の場を提供できる。また，交流学習を通してこどもたちに身につけさせたいコミュニケーションスキルや表現力をつけていくこともできる。そして,交流校の教師との情報共有が必要なことから，教師自身の交渉能力やプロジェクトを進めていくスキルを高めていくこともできると考える。今後ESDの普及のためにIIMEのプロジェクトの活用は有効であると考える。

注

(1) ユネスコスクールと持続発展教育（2011年11月改訂版，日本ユネスコ国内委員会事務局）
(2) 気仙沼ESD研究会紀要（2011年３月10日発行）pp.6
(3) 文部科学省，小学校学習指導要領総則
(4) 文部科学省，中学校学習指導要領　中学校社会　地理的分野及び公民的分野
(5) 文部科学省，高等学校地理歴史　地理A　公民　現代社会
(6) 平成23年度第２回金沢ユネスコ交流会配布資料
(7) JAPAN ARTMILE（http://www.artmile.jp/）
(8) 清水和久（2011），石川県教育工学研究会研究紀要，第36号　pp.29-31